

ほどけば肩の辺りまであるだろう髪は、頭の左右二か所で団子状に結つてあつて、いかにも快活そうな雰囲気を出している。青を基調とした着物は遠目には分からなかつたけど、こうしてよく見てみるとそれは僕の着ているような、ぼろきれ同然のもとはまるで違う、とても上質なものである事が見て取れた。でも、そんないい服もさっきの雨のせいか濡れている。多分、雨宿りできるところを探して此処に辿り着いたんだろう。

理解はできるけど、面倒なものには変わりないな——
—そう思っていると、

——くう。

「あ」

どこに出しても恥ずかしくない、立派な腹の虫の

声が可愛らしく小屋の中に響いた。ここにいるのは僕と彼女の二人だけ。自然と僕の視線は彼女へと向かう。

「な、なによあんた！ わ、私じゃないわよ!？」

自覚はあるんだろう、僕が何も言わずとも彼女はそう吠えた。

「べつに、僕はなにも言っていないよ」

一応言葉ではそう返すものの、それが言葉通りでないのは彼女も分かっているのだろう。ぷつくりと膨らました頬を、まるで林檎のように赤くしている。

そして、ポツリと呟いた。

「あんた、いやなやつね」

そりやどーも、と齒に衣着せず放たれた